この学びに関するSDGsの目標

10 人や国の不平等をなくそう

大学の学び

一人ひとりの権利を守るために、社会福祉分野での実践力を身につける

東洋大学 社会学部 社会福祉学科 加山ゼミ

低学年から実践を意識した少人数の演習で学び合う

東洋大学社会学部社会福祉学科は、福祉の現場をリードする人材の育成を目指している。同学科4年の藤井明理沙（ありさ）さんは、社会福祉士の資格取得を目指し、同学科に入学した。

「高校3年間、ラクビー部のマネージャーを務めました。選手をサポートするうちに、『他者の喜びは、自分の喜び』という気持ちが芽生え、将来は誰かを支える仕事がしたいと思い、福祉の仕事を志しました」

同学科のカリキュラムの特徴は、1年次から少人数制の演習を設置していることだ。1年次は、文献調査やレポート作成など、大学の学びの基礎を学ぶ「社会福祉学基礎演習」を履修。ここでは、社会福祉学の基礎理論も身につける。

2年次は、社会福祉士に必要となる相談援助の基礎を身につける「ソーシャルワーク入門演習」を履修。学生は、相談者・支援者役に分かれ、相談援助のロールプレイを通じて、傾聴・受容などの手法を学ぶ。

また、支援が実際にどのように行われているのか、分野・対象者別に、より具体的に学ぶ。藤井さんが履修した加山弾（だん）教授の「地域福祉論B」では、グループ内で分担して大学周辺の社会資源を調べ、地域に必要な支援を把握する地域調査を行った。

「地域に入ると、多くの課題に気づけるため、フィールドワークで実践的に学べる加山ゼミに入りたいと考えました」

高学年では、ゼミや実習で福祉の現場を学ぶ

3年次からはゼミに所属し、各自の専門性を深めていく。加山ゼミでは、貧困や孤立、排除などの生きづらさに対する福祉的支援のあり方を実践的に学び、「**目標10 人や国の不平等をなくそう**」の達成に貢献する活動に取り組んでいる。

社会福祉協議会（＊1 以下、社協）での支援など、4分野（＊2）に分かれて行うフィールドワークでは、藤井さんは、社協が運営支援する子ども食堂で、小・中学生の学習支援などを行った（**目標1・3**）。

「子ども食堂には、塾に行く機会のない子や、不登校の子、家庭で十分な食事を得られない子などがいます。そうした子から、将来について相談を受けることがあり、自宅や学校とは別の居場所となる『サードプレイス』をつくる必要性を学びました。そこで私たちは、多世代の地域の方が交流する場（**目標11**）をつくりたいと考え、イベントを実施しました」（**写真**）

3年生の多くは、社会福祉士の資

私たちが紹介します

社会学部 社会福祉学科4年 藤井明理沙（ふじい・ありさ）

埼玉県立伊奈学園総合高校卒業。卒業後は、地方公務員として福祉関連業務に携わる予定。

東洋大学大学院 社会福祉学研究科 博士後期課程1年 勝又健太（かつまた・けんた）

新潟県立長岡商業高校卒業。東北福祉大学総合福祉学部社会福祉学科卒業。社会福祉協議会に勤務。

この学びに関する他のSDGsの目標

1 貧困をなくそう

3 すべての人に健康と福祉を

11 住み続けられるまちづくりを

※プロフィールは2021年3月時点のものです。

＊1 地域福祉の推進を図ることを目的とする公共性の高い民間の福祉団体。 ＊2 ①社協が設置・運営する地域のサロン活動、②子ども食堂での学習支援、③若年性認知症の本人・家族の交流会での支援、④社会福祉法人による農福連携（障害者が農業生産活動に携わる取り組み）での支援。

格取得を目指し、夏季休業中の1か月間、福祉関連施設で実習を行う。ゼミ活動における子ども食堂での地域支援に関心を持った藤井さんは、社協で行われるサロン活動（＊3）で実習に参加した。

「実習を通じてボランティア活動をする人と触れ合うことで、サロン活動は、支援者にとっても生きがいになっているのだと感じました。その経験から、将来は地域での支え合いに携わりたいと思いました」

2020年度は、コロナ禍の影響で子ども食堂に訪問できなかった藤井さんだが、子どもとのつながりを継続したいと考え作成した「東洋大だより」を子どもに配り、読んでもらった。大学卒業後は、公務員の福祉職として勤務予定だ。

写真　加山教授からアドバイスを受けて、藤井さんたちは子ども食堂でベトナム料理を味わえるイベントを企画。地域の多世代の人が集い、大盛況だった。

地域で孤立する人の権利擁護について学ぶ

同大学大学院社会福祉学研究科博士後期課程1年の社会人学生・勝又健太さんは、高校3年生の時に新潟県中越地震を経験。復興に向けて助け合う地域の取り組みを目の当たりにし、社会福祉学を志した。東北福祉大学卒業後、地元に戻り、地域包括支援センターなどに勤務。そこで感じたのは、地域で孤立する人の早期発見と介入（＊4）の重要性だ。

日本では、生活保護などの社会福祉制度を利用する場合、制度を利用したい人が申請手続きを完了しなければ、支援を受けられない。中高年の引きこもり問題やゴミ屋敷問題などの当事者は支援を拒むことが少なくなく、その場合は、原則として制度の利用には至らない。

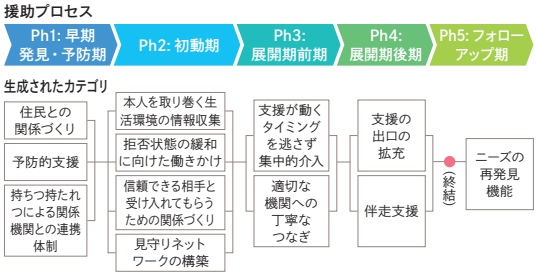
そこで、勝又さんは同大学大学院に入り、加山ゼミで、地域から孤立した人の権利擁護について学び（**目標3**）、望ましい介入のあり方を研究している。修士論文では「『自発的に支援を求めない住民』のアウトリーチ（＊5）に関する研究」（**図**）をテーマとした。現在は、地域での早期発見の仕組みを構築中だ。

「専門職の支援に加えて、地域で緩やかな見守りを行うなど、重層的な支援のネットワークを構築することが重要だと考えています」

同研究科の加山ゼミには、勝又さんのように、福祉の現場で働きながら学ぶ社会人のほか、留学生も多い。

「ゼミの仲間と議論をすると、新しい視点が得られるので、とても刺激を受けます。今後も、当事者の声なき声に耳を傾け、それを福祉の現場へ還元し、社会に発信していく研究者を目指したいです」（勝又さん）

図　**孤立した住民へのアウトリーチ（援助プロセス）を提案**



地域で孤立した人を早期発見し、どのように支援するか、地域連携も含め、研究中。　※資料を基に編集部で作成。

学びとSDGs

多様な価値観を受け入れ、現場で活躍する人材に

社会学部
社会福祉学科　教授
加山 弾
かやま・だん

本学科では、社会福祉の現場で活躍できるような実践力を鍛えるカリキュラムを組んでいます。実践力のうち特に大切なのが、多様な価値観を受容し、様々な他者とコミュニケーションを取る力です。なぜなら、福祉を必要とする人は、乳幼児から高齢者まで幅広く、それぞれに事情を抱えており、接する際には個別の配慮が必要で、それは想像以上に大変だからです。

また、福祉の現場では、主体的に課題を発見したり、企画提案したりする力も必要なため、学生主体で課題を見いだし、企画・運営をするよう、助言しています。

卒業生の就職先は、福祉関連の法人や企業などと一般企業の割合が半々ですが、今後は、より多くの学生に福祉職に目を向けてほしいと考えています。

福祉分野に興味がある高校生は、ボランティアに参加したり、書籍やインターネットで情報収集したりするなど、まずは身近な社会福祉に目を向けてみてください。

＊3 地域のボランティアなどが主体となって、地域で孤立しがちな高齢者や障害者、子育て中の親子らを集め、仲間づくりや福祉的な活動を自主的に行う場。　＊4 援助者が当事者に行う問題解決のための援助の総称。　＊5 支援が必要な状態であるにもかかわらず、支援が届いていない人に対して、行政などが積極的に働きかけて情報・支援を届けるプロセス。